

異文化間教育学会 第 43 回大会ご挨拶

この度、異文化間教育学会第 43 回大会を、2022 年 6 月 11 日（土）・12 日（日）に立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催させていただくことになりました。過去 2 年間のオンライン開催を経て、今回は、オン-campusでの実施を予定しています。開催に当たっては、新型コロナ感染防止対策を万全に行い、久しぶりの対面での大会として、皆様にとって実りある時間を過ごしていただけるよう、実行委員一同尽力して参ります。

2020 年初頭から始まった新型コロナ禍の中で、私たちは日々、教育者として、また研究者として、さまざまな実践課題と向き合ってきました。そして、あらゆる学校現場における試行錯誤の中から、新たな成果や課題が生まれています。今回の学会は、ウィズ・コロナ時代における異文化間教育研究をそれぞれの立場で考え、共有し、学び合い、今後への希望を感じながら帰っていただけるような、そんな場になればと願っています。

異文化間教育学会 第 43 回大会準備委員会
委員長 堀江 未来（立命館大学）

The 43rd Annual Meeting of the Intercultural Education Society will be held on June 11th (Sat) and 12th (Sun), 2022 at Ritsumeikan University Kinugasa Campus (Kyoto, Japan). After being held online for the past two years, this time we are planning to hold it on campus by taking all possible measures to prevent the infection of COVID-19. We will do our best to make this face-to-face conference fruitful and meaningful for everyone.

Since the COVID-19 began in early 2020, we have been facing various issues every day as practitioners and researchers of intercultural education. We hope that this conference will be a place where you can reflect on and share your experiences and thoughts, learn from each other, and feel hope for the future of intercultural education practices in the post-COVID-19 era.

Miki HORIE (Ritsumeikan University)
Conference Organising Committee Chair

大会参加者へのご案内

大会日程

大会会期：2022年6月11日（土）－6月12日（日）

会場：立命館大学 衣笠キャンパス

* プレセミナー・プレイベント：2022年6月10日（金）

参加資格

会員・非会員を問わず、どなたでもご参加いただけます。

大会参加費

		事前料金 (5月19日まで)	当日料金
大会参加費	正会員	5,000円	6,000円
	学生会員	3,000円	4,000円
	通信会員	5,000円	6,000円
	非会員（一般）	6,000円	7,000円
	非会員（学生）	4,000円	5,000円
	維持会員	1口1名様無料	7,000円
	名誉会員	ご招待	

※お払い込みいただいた参加費などは、理由を問わず返却いたしません。予めご了承ください。

- 領収書は、当日に受付でお渡しいたします。
- 当日参加費をお支払いの方は、釣銭のないようにご準備をお願いいたします。
- 6月11日（土）、12日（日）の午前9時より受付を行いません。受付にて名札をお受け取りいただき、大会会期中はその名札をご着用ください。
- 特定課題研究、公開シンポジウム、個人発表、共同発表、ケース/パネル発表、ポスターセッションの発表者および司会者の方は「発表者・司会者受付」にお越しください。
- 会場には一般来訪者用の駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。
- 会期中、学内の食堂等は営業していません。昼食は近隣の飲食店をご利用いただくか、正門横のコンビニをご利用ください。学会会場内に昼食会場を設けています。なお、食事中は黙食をお願いします。
- 新型コロナウイルス感染防止のため、学会会場ではマスクの着用と定期的な手指消毒をお願いします。なお、教室等はコロナ定員の設定になっています。

会場でのWiFi接続について

- 会場内では、eduroamに接続いただけます。ご利用になる場合は、無線LANのネットワーク一覧から、SSID（ネットワーク名）「eduroam」に接続してください。ユーザーIDとパスワードの入力画面が表示されたら、以下のユーザーID・パスワードで認証してください。

ユーザーID：所属機関でご利用中のユーザID@所属機関のドメイン名

パスワード：所属機関でご利用中のパスワード

- 念のため、発表に関わる重要な資料等は、あらかじめ発表時にお使いになるパソコンにダウンロードの上、会場にお越しください。
- オンライン接続を行うことになっている会場においては、学内有線に接続されたパソコンを会場校で用意しています。

発表者のみなさまへ

- 発表時に提示するスライドの投影に必要なパソコンは、各自でお持ちください。会場では HDMI または RGB での接続となります。なお、パソコンが持ち込めない場合には、事前に大会実行委員会までメールにてご連絡ください。Mac の場合はアダプターも各自でご用意ください。
- ポスター発表に関わる掲示作業は、6 月 11 日（土）8:30 から行えます。また、12 日（日）16:00 にポスター発表が終わりましたら、各自で撤収をお願いします。ポスター発表の最終時間を待たずに会場を出られる場合には、大会準備委員会までご相談下さい。

託児サービス

- 第 43 回大会では、託児サービス業者に委託し、大会会場の建物の中で託児サービスを提供いたします。事前申し込みをいただいた方のみが対象となりますのでご了承ください。

連絡先

- 大会全般・発表申込・大会当日に関するお問い合わせ
第 43 回大会準備委員会
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学国際教育推進機構 堀江未来研究室内
e-mail : ibunka43@gmail.com
- 参加事前申込み・お支払いに関するお問い合わせ
異文化間教育学会大会ヘルプデスク
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 （株）国際文献社内
e-mail : iesj-desk@conf.bunken.co.jp
FAX : 03-5227-8632
- 会員登録に関するお問合せ
異文化間教育学会事務局 会員業務係
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 （株）国際文献社内
e-mail : iesj-post@bunken.co.jp
FAX : 03-5227-8631

大会日程

	6月10日 (金)	6月11日 (土)			6月12日 (日)		
9:00		9:00-受付 (清心館 1階 commons)			9:00-受付 (清心館 1階 commons)		
9:30		9:30-12:00 ■ 特定課題研究 「異文化間教育学における研究方法論を考えるー『移動』をめぐる経験を捉えるためにー」 (SE401)		※9:30 -18:00 ■ ポスターセッション (清心館 1階 commons)	9:30-10:30 ■ ポスターセッション (清心館 1階 commons)		
10:30					10:30-12:00 ■ 個人発表 (SE204, 205, 206, SE001) ■ ケース/パネル発表 (SE202, 203)		※10:30 -16:00 ■ ポスターセッション (清心館 1階 commons)
12:00		12:00-13:00 ■ 昼食 (清心館 1階 commons, SE001, 002, 003, 005, 006)	12:00-13:00 ■ ネットワーキング交流会 (SE009)		12:00-13:00 ■ 各種委員会 学会誌編集委員会 (SE202) 研究委員会 (SE203) 広報・ICT委員会 (SE204) 企画委員会 (SE205) グローバル展開委員会 (SE206)	12:00-13:00 ■ 昼食 (清心館 1階 commons, SE001, 002, 003, 005, 006)	12:00-13:00 ■ 大会企画 「『異文化間教育事典』刊行記念シンポジウムー異文化間教育の継承と創造ー」 (SE401)
	12:30-受付						
13:00	13:00-17:00 ■ プレゼンター 「ポストコロナ・ウィズコロナの異文化間教育実践を創ろうー Appreciative Inquiry を使って語り合い、共に創り出すワークショップー」 (学而館 二階研究室 3)	13:00-14:00 ■ 総会 (SE009)			13:00-16:00 ■ 公開シンポジウム 「キャンパスアジアの10年とこれから: 東アジアが育むグローバル人材」 (SE401)		
14:00		14:00-17:30 ■ 共同発表 (SE202, 203, 204) ■ 個人発表 (SE203, 204, 205, 206, SE001, 002, 003)					
15:00							
16:00	13:00-14:40/ 16:00-17:20 ■ プレイバント 「写真座談展~共創的芸術実践の場に参加しませんか」 (旧堂本印象邸)						
17:20							
17:30	17:30-19:30 ■ 理事会 (洋洋館 YY401教室)						

*6月11日・12日のプログラムは全て清心館 (SE) で行います。

住所：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

衣笠キャンパスへのアクセスに関するお問い合わせ：075-465-8144（キャンパスインフォメーション）

キャンパスマップ



6/10(金)のプレセナーでは[7]学而館、イベントでは[35]旧堂本印象邸、理事会では[12]洋洋館、6/11-12(土日)の大会では[10]清心館を使用します。

会場案内

大会前日 6月10日(金)

ブレセナー	13:00-17:00 (受付 12:30-)	学而館 2 階研究会室 3
プレイベント①	13:00-14:40 (受付 12:45-)	旧堂本印象邸
プレイベント②	16:00-17:20 (受付 15:45-)	旧堂本印象邸
理事会	17:30-19:30	洋洋館 YY401 教室

大会第1日 6月11日(土)

受付	09:00-	清心館 1 階コモンズ
ポスターセッション	09:30-18:00	清心館 1 階コモンズ
特定課題研究	09:30-12:00	SE401
ネットワーキング交流会	12:00-13:00	SE009
各種委員会		
学会誌編集委員会	12:00-13:00	SE202
研究委員会	"	SE203
広報・ICT 委員会	"	SE204
企画委員会	"	SE205
グローバル展開委員会	"	SE206
総会	13:00-14:00	SE009
個人発表	14:00-17:30	SE203~206, SE001~003
共同発表	"	SE202~204

大会第2日 6月12日(日)

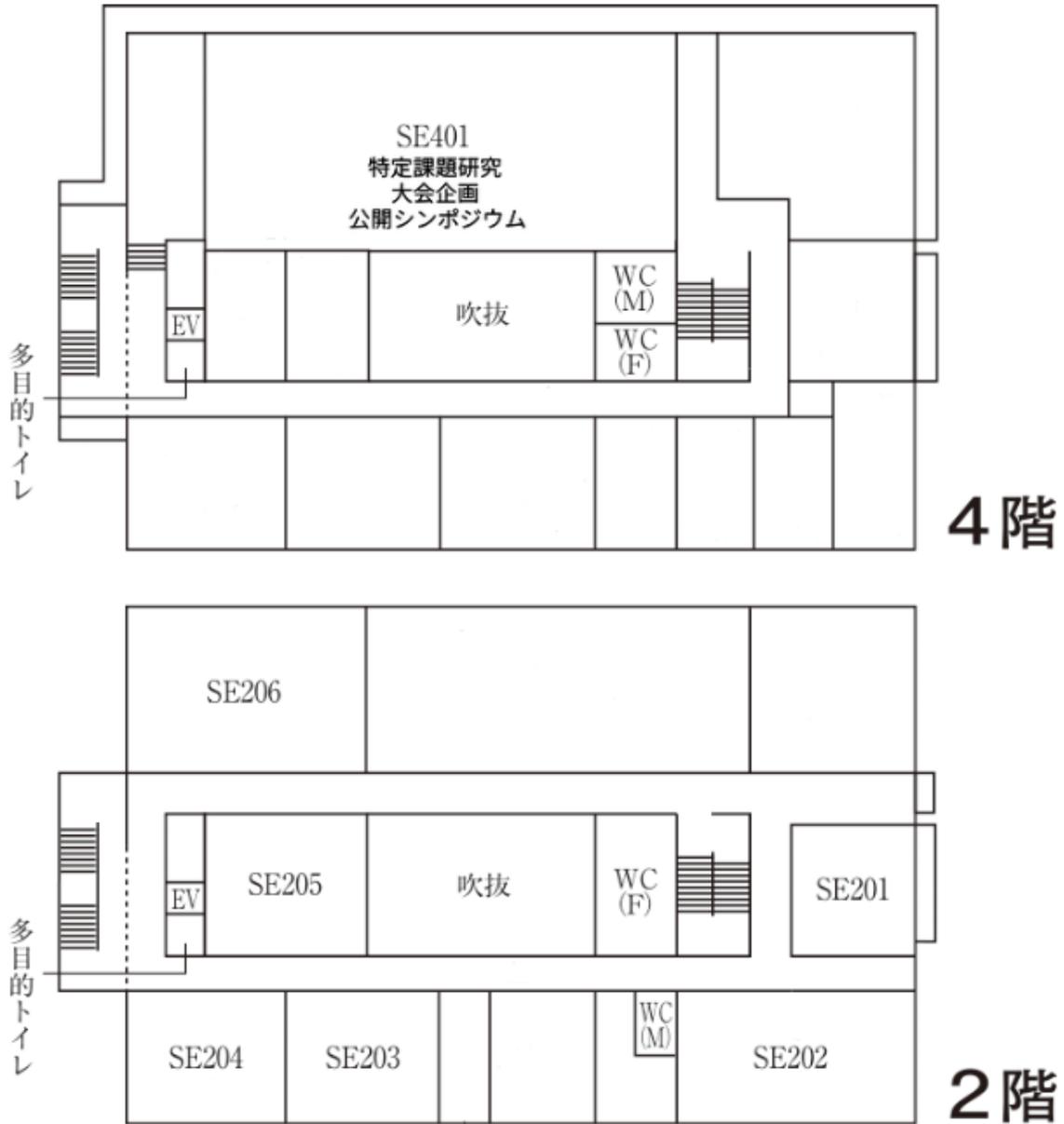
受付	09:00-	清心館 1 階コモンズ
ポスターセッション	09:30-16:00	清心館 1 階コモンズ
個人発表	10:30-12:00	SE204~206, SE001
ケース/パネル発表	"	SE202, 203
大会企画	12:00-13:00	SE401
各種委員会		
ネットワーキング委員会	12:00-13:00	SE202
学会誌編集委員会	"	SE203
公開シンポジウム	13:00-16:00	SE401

■大会本部・学会本部	09:00-18:00	SE007, SE008
■休憩室・昼食会場		清心館 1 階コモンズ, SE001~003, SE005~006
■書籍展示 11日(土)	09:00-18:00	清心館 1 階コモンズ
12日(日)	09:00-16:00	"
■クローク 11日(土)	09:00-18:00	SE008
12日(日)	09:00-16:00	"

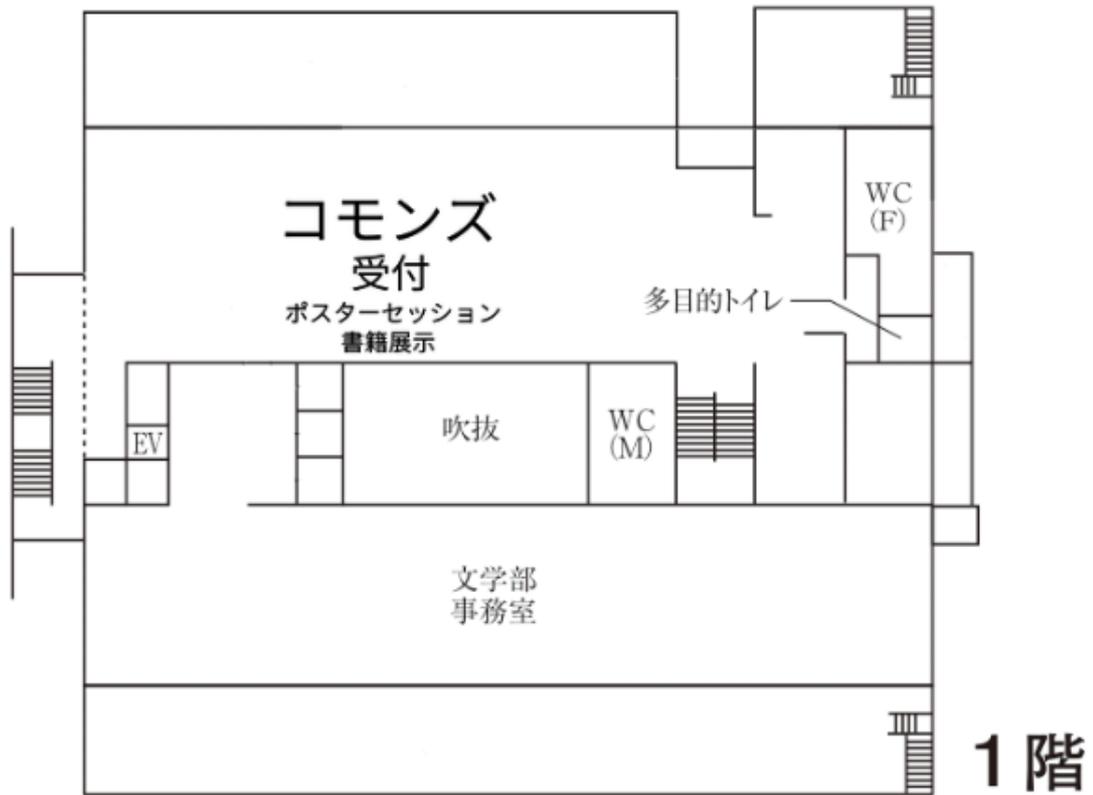
※クロークに担当者つきません。荷物の管理は各自でお願いいたします。また、貴重品等は必ずお持ちください。

フロアマップ

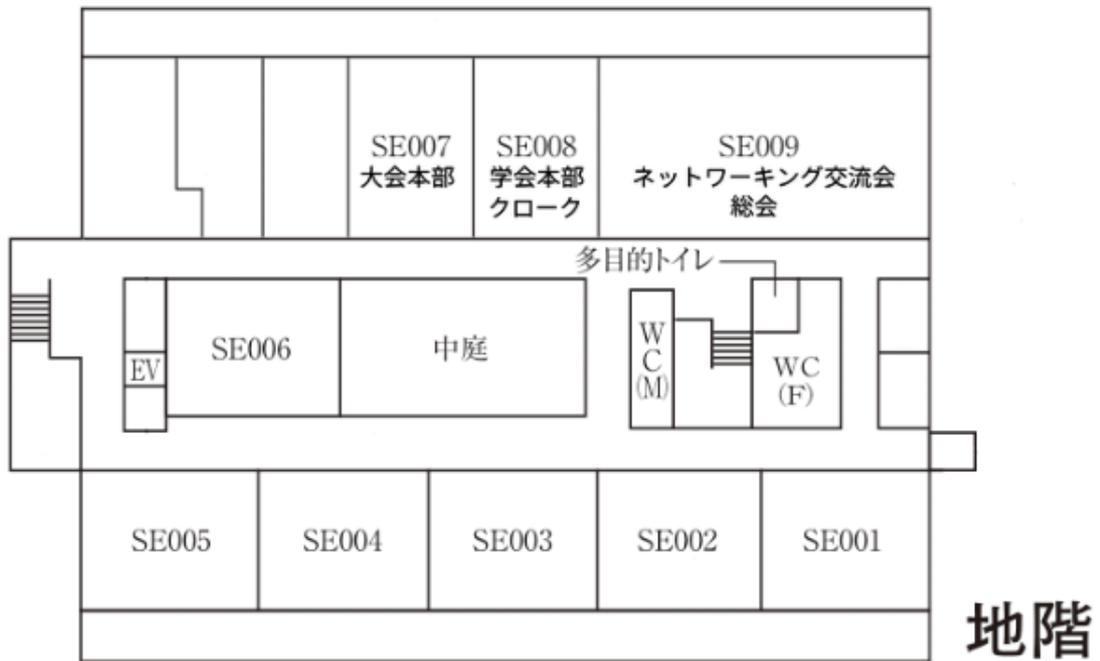
清心館の地階、1階、2階、4階が会場です。受付は1階のコモンズです。



2階では、各種発表および委員会を開催します。



1階コモンズは休憩室としてもご利用いただけます。ポスターセッションや書籍展示もコモンズにて開催します。



地階では、個人発表・ネットワーク交流会・総会を開催します。

プレセミナー

日時：2022年6月10日（金）13:00～17:00（受付開始 12:30～）
場所：立命館大学衣笠キャンパス 学而館 2階研究会室 3

これからの異文化間教育を共創する

– Appreciative Inquiry を使って語り合い、未来のビジョンを描くワークショップ –

■ 企画趣旨

私たちは、2020年初頭から、新型コロナ感染拡大状況の影響を大きく受けながら日常生活を送ってきました。海外渡航や人的交流が主要な方法論となっている異文化間教育実践においても、その活動は大きく制限を受けることとなりました。私たちは、異文化間教育の実践者として、また研究者として、制限の中においてもできることを模索し、さまざまな新たなアプローチをもって学習者の学びと成長を支援してきました。

今回のプレセミナーでは、第40回大会（2019年）で行った企画と同様に、Appreciative Inquiry を使って体験的に異文化間教育実践の意義やこれからの可能性を展望します。私たちが異文化間教育にどのような魅力や面白さを感じているのかをお互いの体験を語る中で再発見し、私たちが大切にしたい異文化間教育のあり方や未来のビジョンを創っていきます。私たちはどんな異文化間教育の実践を積み重ねていきたいと考えているのか。それによってどんな社会を作っていきたいのか。皆さんと一緒に語り、自由に異文化間教育の未来を構築するための場を作りたいと思います。

■ Appreciative Inquiry (AI) とは？

AIは近年、注目されている組織開発の一手法です。個人や組織の強み、ポジティブな側面に焦点を当て、組織として何を目標としてどう行動を起こしていきたいのかを、小グループでの対話を通して明確にし、理想の未来をイメージして、行動につなげるというアプローチです。このアプローチは、英国航空、リクルート、マクドナルド、国連などをはじめ、様々な組織で導入されています。AIを使うことで、自分たちの組織のミッションや強みへの理解が深まり、一人一人がChange Makerとして主体的に組織や社会を変革していこうと行動していく効果が報告されています。

■ 講師

小野 詩紀子（南山大学国際センター 特任講師）

略歴：英国マンチェスター大学 MA TESOL (Intercultural Education Pathway) with Distinction で取得。その後、南山大学国際センター特任講師として、国際教育寮の教育プログラムの企画、立ち上げ、COIL型授業デザイン、海外留学相談などに携わっている。専門領域は、英語教育、異文化コミュニケーションなど。

川平 英里（明治大学大学院国際日本学研究科）

略歴：横浜国立大学大学院にて教育学修士号（臨床教育学）を取得。その後、教育系企業での言語講師、名古屋大学国際教育交流センター特任助教、学術専門職、立教大学グローバル教育センター（リーダーシップ教育プログラムのコーディネーター）を経験。現在は、博士後期課程にて、「共生」する児童を育む小学校の授業と児童の関わりによる学びに関する研究に従事。

■ アドバイザー

平井 達也氏（立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター長 教授）

略歴：フルブライト奨学生としてミネソタ大学大学院にて博士号（Ph.D.カウンセリング心理学）を取得。ミネソタ大学留学生センターカウンセラー、カリフォルニア大学サンディエゴ校カウンセリングセンターカウンセラー、九州産業大学国際文化学部臨床心理学科常勤講師などを経て、現職。主な専門領域は、キャリアカウンセリング、異文化間カウンセリング、リーダーシップ教育、グループアプローチ、ポジティブ心理学など。

■ サポート

BRIDGE Institute

<https://www.bridgeinstitute-international.com>

プライベート

日時：2022年6月10日（金） 第1回 13:00～14:40（受付 12:45～）

第2回 16:00～17:20（受付 15:45～）

場所：立命館大学衣笠キャンパス正門そば 旧堂本印象邸 母屋

写真座談展 —共創的芸術実践の場に参加しませんか？—

■ 企画趣旨

香で清めた場に、靴を脱いであがり、写真を横目に円座し、一緒に煎茶を喫しながら語りあいます。特に目的は設けません。たまたまその場に集まった者が、互いの言葉に耳を傾け、話しを紡いでいきます。写真展でも、トークイベントでも、ワークショップでもない、新しい場です。無目的性の漂う共創的芸術実践の場をともに創りませんか？

私たち「偶（たまさか）」は、これまで京都の空間・文化・写真を借景に、人々の新たな交流の場、共創的芸術実践の場「写真座談展」を KYOTOGRAPHIE：京都国際写真祭などにおいて開催してきました。南仏のアルル国際写真祭では英語でも開催しています。「偶」は、荻野 NAO 之（アーティスト）、川崎仁美（盆栽研究家）、島村幸忠（煎茶家）、竹内万里子（批評家）、旦部辰徳（美学・文学研究者）といった異なる分野のメンバーで構成され、その都度いろいろな組み合わせで開催にあたっています。

■ 「偶（たまさか）」メンバー

荻野 NAO 之（アーティスト、スタンフォード大学レクチャー、偶代表）

略歴：東京生まれ、メキシコ育ち（3～7歳、10～15歳、22～23歳の合計10年）、京都在住。名古屋大学理学部物理学科卒。メキシコ合衆国ケレタロ州立大学言語文学部留学。（株）電通に6年半勤務したのちアーティスト活動に専念。ウズベキスタン国際写真フェスティバル招聘作家、アルメニア国際写真フェスティバル招聘作家、KYOTOGRAPHIE（京都国際写真祭）オフィシャルフォトグラファー、著作にインタビュー写真集『A Geisha's Journey』（2007年：講談社インターナショナル刊）など

川崎仁美（盆栽研究家）

島村幸忠（京都芸術大学 芸術学部 非常勤講師、煎茶家）

竹内万里子（京都芸術大学 美術工芸学科学科長 教授）

旦部辰徳（美学・文学研究者）

※ [偶]からは、各回異なる組み合わせのメンバーが参加予定です。

特定課題研究

日時：2022年6月11日（土） 9:30-12:00

異文化間教育学における研究方法論を考える —「移動」をめぐる経験を捉えるために—

■ 趣旨説明：

小林 聡子（千葉大学）

■ 話題提供：

谷口ジョイ（静岡理科大学）

子どものリテラシー実践を捉える研究方法論の転換
— 不可避な移動を経験した帰国児童を事例として —

大川ヘナン（大阪大学大学院）

「当事者」と「研究者」の関係を問い直す
— 移動する「私」のオートエスノグラフィを手がかりに —

住野 満稲子（明治大学）

新たな知識の探求過程としての「移動」
— フェミニスト・スタンドポイント認識論を手がかりに —

■ 指定討論者：

柴山真琴（大妻女子大学）

■ 企画：研究委員会

小林聡子（千葉大学）

柴山真琴（大妻女子大学）

芝野淳一（中京大学）

青木香代子（茨城大学）

川島裕子（大阪成蹊大学）

発表資料ダウンロード用二次元コード：



発表資料ダウンロード用リンク：

<https://tinyurl.com/yy5u253g>

（当日有効）

異文化間教育学における研究方法論を考える

—「移動」をめぐる経験を捉えるために—

小林 聡子（千葉大学）

1. 2022 年度特定課題研究テーマ設定の趣旨

従来、異文化間教育学は学際的（multidisciplinary）な場であり、異文化間教育に関わる様々なテーマについて異なる学問分野に依拠する研究者らが各々の研究方法論を用いて研究に取り組んできた。『異文化間教育学体系 3—異文化間教育のとらえ直し』（2016）では、学会が設立されて以来蓄積されてきた研究成果に関し、社会・心理・言語という異なる研究領域の視点から再精査がなされ、今後の課題が洗い出された。特に、社会学の視点からは、複層的要因を考慮して「異」という研究対象を捉え直すこと（馬淵 2016）、心理学の視点からは、個の発達を社会との関係性や時間軸からも捉えていくこと（塘 2016）、そして言語学の視点からは、研究者の依拠する枠組みへの自覚や「言語」をめぐる観点自体を再考すること（山本 2016）の必要性が指摘された。改めてこれらの指摘において何が問われているのかを考えると、それが「異」「文化」「間」とは何かといった研究の前提となる根本的な概念や、それらをめぐるアプローチ自体の問い直しだといえよう。それは、まさに箕浦（2012）が指摘した研究方法論における存在論と認識論の課題に他ならない。

本学会では、これまでもポストコロニアル的な研究者の立場性の課題、研究対象者や調査の場との関係性の捉え直しを取り上げてきた（『異文化間教育』24号 [2006]、第35号 [2012]、第43号 [2016]、第53号 [2021] 等）。一方で、具体的な研究手法をどう研究方法論が下支えるのかを軸にした議論は未だ限られている。異文化間教育学研究が従来の学問分野間の協働（interdisciplinary/crossdisciplinary）を超えて、より transdisciplinary な学際性へと展開されることへの期待を鑑みても（佐藤・横田・坪井 2016）、分野縦断的に共有される研究方法論を再考することは有用かつ必要不可欠であろう。

そこで、本年度の特定課題研究では、物理空間や文化間、言語間といった様々な「間」の「移動」をめぐる経験を捉えることを共通のテーマに、異文化間教育学研究における研究方法論をより確かなものへと捉え直すように取り組んできた。以下、これまでの議論を含めて本テーマ設定の意図を説明した後、大会当日の発表の流れを示す。

2. 研究方法論とは

研究方法論とは単なる研究手法ではなく、研究者による存在論・認識論を含むものである（箕浦 2012, 野村 2018 等）。存在論は、現実世界をどのようなものと措定するかという論理であり、認識論とは、私たちがその世界をどのように知るかという認識の論理である。存在論は認識論を方向づけ、認識論によって影響を受けるものであり、互いの前提となっている。つまり、依拠する学問分野によって、問いの立て方や調査手法、そして問いに対する答えの出し方の傾向が異なるということだけではなく、たとえ同じ学問分野で同じ現象や対象者を研究する場合でも、現象を捉える認識論や存在論によって研究プロセスや導き出される結論にも大きな影響を与えることを指す。

詳細な区分やその呼び名は分野によって違いがあるものの、従来、存在論には「基礎づけ主義」や「本質主義」を前提とするものと、「反基礎づけ主義」ないし「社会構築主義」に依拠するものがあるとされてきた（箕浦2012, 野村2018等）。前者は、ある「現実」が本質主義的なものとして存在していると捉えるもので、後者はそれが社会的に構築されており、見る視点によって見え方が変わるとする考え方である。認識論についても区分や定義

に議論はあるが、主に「実証主義的アプローチ」「解釈的アプローチ」「批判的アプローチ」に分類されてきた（箕浦 2012）。実証主義的アプローチでは基礎づけ主義の前提から、事象を「客観的」に把握する立場をとる。解釈的アプローチは反基礎づけ主義の立場を取り、相互作用を通して造られる「現実」を研究対象がどう解釈しているかに重きを置く。一方で、批判的アプローチはどこを起点に見るかで位置付けが分かれる。例えば、箕浦（2012）は構築主義の中に批判的アプローチを含み、「現実とは再構成されたもの」という立場は解釈主義と同じだが、それ故に「造りかえることができる」という志向性をもつものとする。一方で、野村（2016）は造り変えるべき「見えない構造」を前提とする批判的アプローチを基礎づけ主義に立つ「批判的实在論」だと位置付ける。

上記のように理論上も存在論・認識論は明確に分類することはできない。さらに、近年ではそもそも「本質主義」対「構築主義」や「客体」対「主体」、「人」対「自然」のような二元論自体が問題視され、「関係論的存在論」（インゴルド 2020）などのような、新たな存在論・認識論のあり方が模索されている。その中で、本特定課題研究の目的は「タダシイ」分類や定義づけをすることではない。また、どの立場が「タダシイ」のかを論じるものでもない。あくまでも、このような既存の議論を参照枠としながら自己の研究方法論を省みること、自分が知っている世界はどのようにあると措定し、どういった研究手法を選択してきたのかを精査することを目指す。それは、真摯に異文化間教育学研究及び実践のこれからに向き合う重要な過程であるといえよう。

3. 今年度の特定課題の歩みと大会当日の流れ

本年度は特定課題研究への会員の積極的な参画を促すべく、テーマに沿った内容での発表を募集し、*4名の登壇者らが決定した。これまでに12月と3月に公開研究会を実施し、さらに本テーマに関連して3月には野村康氏（名古屋大学・環境政治学）、4月は知念渉氏（神田外語大学・教育社会学）によるオンライン講演会を行い、議論を深めてきた（各イベントの報告は学会HPを参照）。本大会ではその成果を以下3名の登壇者と報告したい。

まず、谷ロジョイ会員は、実証主義が前提とされる研究分野にてく不可避な移動を経験した子どものことば>に関する量的な調査を進めていく中で感じた疑問や葛藤、研究対象への眼差しの変化から、解釈的アプローチを取り入れる模索の過程を明らかにしていく。

そして、大川ヘナン会員は、日本とブラジルを「移動」する「外国ルーツの子ども」として研究者に「描かれる側」であった経験について、現在は「描く側」である研究者として、国家間移動、時間的経過、立場性の変化を含めオートエスノグラフィックに捉え直す。

最後に、住野満稲子会員は、ニューヨーク市におけるラティーナ学生の「移動の経験」を「フェミニスト・スタンド・ポイント認識論」という批判的アプローチから捉えることをめぐり、自らの認識論・存在論を再考する。

これらの発表を踏まえた上で、研究方法論に詳しい柴山真琴会員を指定討論者に迎え、異なるメタアプローチに依拠する発表を対話的に取り上げる。本特定課題研究を通して方法論的多様性を提示すると同時に、異文化間教育学研究における方法論的確かさの重要性を提起することを目指す。

*大会での登壇は叶わなかったが、3月末まで本間祥子会員とも議論を重ねられたことに感謝したい。

【参考文献】

インゴルド, T. (2020) 『人類学とは何か』 (奥野克己・宮崎幸子訳) 亜紀書房.

佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健編著 (2016) 『異文化間教育学体系4—異文化間教育のフロンティア』 明石書店.

野村康 (2017) 『社会科学の考え方—認識論、リサーチ・デザイン、手法』 名古屋大学出版会.

箕浦康子 (2012) 「異文化間教育」研究という営為についての2、3の考察—パラダイムと文化概念をめぐって. 『異文化間教育』 第36号, 89-107.

山本雅代・馬淵仁・塘利枝子編著 (2016) 『異文化間教育学体系3—異文化間教育の捉え直し』 明石書店.

子どものリテラシー実践を捉える研究方法論の転換

—不可避な移動を経験した帰国児童を事例として—

谷ロジョイ（静岡理科大学）

1. はじめに

本特定課題の趣旨文にあるように、研究方法論（methodology）は、単に、データ収集や分析の方法（method）のみに限定されるものではなく、こうした研究手法を規定する、より高次の概念を指す。研究方法論の基盤となる概念としては、「存在論（ontology）」と「認識論（epistemology）」が挙げられるが、前者は、研究という営みの主体である研究者が、世界をどのように捉えるか、を示すものであり、後者は、研究者が、どのような手段を用いて、どのような「知」に接近するのかを措定するためのメタ的なアプローチと言える。

本稿では、発表者が「帰国児童によるリテラシー実践」を捉える過程において生じた「研究方法論的立場」の変化を例に、研究者自身の研究方法論的な立ち位置を明確にした上で、研究課題の設定や研究手法の選択を行う重要性について検討する。

2. 帰国児童のリテラシー実践をめぐる方法論の変化

本発表で扱う事例は、保護者に帯同される形で「不可避な移動」を経験し、海外生活を通して複数の言語を習得した帰国児童のリテラシー実践に関する研究である。発表者は、帰国児童の英語保持を目的とした文庫活動に携わっていたことから、子どもの第二言語喪失・保持に関する研究の着想を得た。当該文庫は、保護者によって組織されたものであり、蔵書の貸し出し、読み聞かせ等のリテラシー活動が行われていた。発表者は、当時、活動に参加する保護者の間で流布していた「低年齢で帰国した子どもは、海外で獲得した言語を失う」という言説に着目し、その真偽を明らかにすることを研究の一義的な目的とした。

帰国児童の言語喪失を扱った先行研究は、実証主義に基づいた定量的研究がその多くを占めており（友田, 2007）、海外滞在年数や帰国時の年齢、帰国後の経過年数といった数値化が可能な要因に焦点が当てられていた。また、発表者が、研究者としてのトレーニングを受けた教育機関も、実証主義的な研究手法を体得する場であったため、「学問の基底にある暗黙の前提的理解（箕浦, 2008: 9）」に基づいて、以下のような研究課題を設定した。

- (1) 帰国児童が海外で獲得した英語リテラシー能力はどのように変化するのか
- (2) 帰国児童の英語リテラシー能力の保持・伸長に、年齢要因は関わるのか

(1) については、帰国児童の読解能力を、可能な限り正確に数値化し、データの推移を 24～36 ヶ月にわたり追跡調査するという手法を選択した。米国で広く用いられ、信頼性、妥当性が実証された読解力査定（Developmental Reading Assessment=DRA）によりデータを収集し、音読の正確さ・流暢さ、物語の予測や内容の再生といったマイクロなリテラシー能力を測定した。その結果、1 組の兄弟に顕著な読解能力の喪失が見られた。(2) については、4 組の兄弟姉妹を対象とすることで、帰国児童のリテラシー保持に関わる年齢要因について明らかにしようと試みた。先行研究によると、言語保持の程度を左右するとされる境界年齢（Schmid, 2006）が存在するとされていたが、定量的調査によって導かれた結果は、これを支持するものではなかった。

上述の縦断的な読解力査定により、子どもたちのマイクロな読解能力の推移が可視化され、言語保持の程度についても推定することが可能となった。その一方で、発表者は、数値化されたデータが意味するものについて葛藤を抱えていた。帰国児童の言語保持や喪失について解釈、説明するためには、子どもたちのリテラシー実践に関わる複雑かつ多様な現象

について検討する必要があったが、実証的アプローチに依拠した仮説検証型の研究手法では、これらが見過ごされる可能性があった。それに加え、調査が進捗するに従い、協力者である子どもたちは、「私」に働きかけ、共に場（フィールド）を創り上げる能動的な存在であると感じるようになっていた。また、「私」が見ている現実は、「私」の目と耳というフィルターを通して再構築されたものであると考えるようになった。こうした経緯から、発表者は、研究方法論的立場を大きく転換させ、「帰国児童による日常的なリテラシーの実践過程と社会との関わり」を解釈的アプローチに依拠したエスノグラフィーによって明らかにする、という新たな研究課題を得ることとなった。

新たな研究デザインにおいては、子どもたちのリテラシー実践を捉え直すため、以下の点に焦点を当てた。

- (1) 帰国児童にとって英語によるリテラシー能力を保持・伸長することの意味とは何か
- (2) 帰国児童は成長とともに自身のリテラシーをどのように捉えているか

また、調査手法としては、子どもたちの家庭に入り込み、家庭におけるリテラシーの機能、リテラシー活動への保護者の参加、リテラシー実践における保護者とのインタラクションをつぶさに観察するエスノグラフィーを約 7 年間にわたり実施した。その結果、英語によるリテラシー能力を保持していた兄弟姉妹については、「家庭において遊びや楽しみのための自発的なリテラシー活動が英語によって行われていた」、「英語を用いた人的ネットワークの保持や構築がなされ、社会的なやりとりを目的とした英語によるリテラシー活動が行われていた」、「保護者が英語のリテラシー保持に肯定的な態度を示し、これらを支援していた」ということが分かった。また、調査対象となった子どもたちは、「与えられた環境の中で、自らが、必要に応じてリテラシー能力を取捨選択し、主体的にリテラシー活動に携わっている」ということが明らかとなった。

3. まとめ

以上のように、発表者は、研究の初期段階において、帰国児童のリテラシーを「客観的な所与」として捉え、リテラシー能力の喪失・保持に関わる要因を実証主義的アプローチによって導き出すことを目指していた。しかし、多様な文化的・社会的背景をもった少数集団である帰国児童を対象とし、諸条件を統制した上での定量的な手法を用いることは必ずしも適切な方法ではなかった。それと同時に、子どもたちのリテラシー能力を「唯一の実相」として捉えることへの葛藤が生じ、解釈的アプローチへの転換を図ることとした。

異文化間教育学のような学際的領域における学問的対話においては、研究方法論に関する議論が欠かせない。解釈的アプローチに基づいた質的研究は、これまで「解釈が研究者の主観によるもので、偏りがあり、分析手法も科学的ではない」との批判に晒されてきたが、こうした批判においては、存在論、認識論に関する議論が欠如していることがある。生産的、かつ建設的な対話を実現させるためには、どのようなメタアプローチを採用する場合であっても、研究者が、自身の研究方法論的立場に自覚的になる必要があるだろう。

【参考文献】

- 友田路 (2007) 「外国語保持教室における低学年帰国子女の第二言語喪失：動詞句 TLU 値分析と退行仮説の観点から」『言語情報科学』5号, 147-164.
- 野村康 (2017) 『社会科学の考え方：認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会.
- 箕浦康子 (編著) (2009) 『フィールドワークの技法と実際 II 分析・解釈編』ミネルヴァ書房.
- Le Compte, M.D., & Preissle, J. (1993). *Ethnography and qualitative design in educational research* (2nd Ed.). New York: Academic Press.
- Schmid M. S. (2006). Second Language Attrition. In Brown, K. (Ed.), *The Encyclopedia of Language and Linguistics* (pp. 74-81). (2nd ed). London: Elsevier.

「当事者」と「研究者」の関係を問い直す

—移動する「私」のオートエスノグラフィを手がかりに—

大川ヘナン（大阪大学大学院）

1. はじめに

異文化間教育研究における「移動」の中心的な登場人物は子どもたちであった。国境を越える移動、文化を跨ぐ移動、社会システムを渡り歩く移動、様々な場面において子どもたちは「移動」の当事者として語られてきた。しかし、「移動」の当事者である子どもたちの語りはその都度研究者によって取捨選択され、研究者を通してのみ表出されてきた。研究者と当事者の間にある非対称な関係性から導き出される真実は「部分的事実」（クリフォード 1996）であることは既に自明の指摘であるが、一方で当事者側はその「部分的事実」をどのように受け取っているのかに目が向けられることはなかった。

そこで本発表では当事者にフォーカスを絞り、解釈的アプローチの視点から移動を経験した当事者のリアリティを描き出すことを中心的な課題とする。そして、本発表では第三者の移動を経験の分析の対象とするのではなく、移動を経験した当事者であり、現在研究者である発表者自身の物語を分析の対象として採用する。ここでは発表者自身の物語をオートエスノグラフィして描き出し、「他者理解」の側面から移動を理解するのではなく、「自己理解」の側面から移動のリアリティを見つめ直してゆく。解釈的アプローチの主要な視点が人々の意味世界を理解するという点にあるのならば（箕浦 2009）、本発表の目的は移動によって自己の意味世界が他者に描かれた自己解釈を通してどのように変化したのかを明らかにしていくことである。

また特定課題研究を進める中で、本発表は当事者の意味世界を理解するだけでなく、学術界における当事者と研究者の硬直的な関係性の問い直しを迫るものでもあることが浮かび上がってきた。その点で、社会構造の変革に力点を置く批判的アプローチにも通じている。そこで本発表では、解釈的アプローチと批判的アプローチの2つの視点から移動する「私」の経験を記述し、当事者と研究者の関係を問い直す。次節以降では、本発表の背景にある2冊の書籍との出会いを取り上げながら、当事者でもあり研究者でもある「私」が移動の過程で経験する葛藤や違和感を記述する。以下、一人称は「私」を用いる。

2. 『外国人の子どもと日本の教育』宮島喬・太田晴雄編

『外国人の子どもと日本の教育』を重要な1冊として上げる理由はこの書籍をきっかけに私が自分自身の在日外国人としての当事者性に気づくことになったからである。私がブラジルから渡日したのが8歳の時であり、18歳まで日本の公立学校に通っていた。その間多くの困難に直面してきた。言語的な障壁、努力しても成果の現れない勉強、そして、いじめであった。しかし、私はそれらの原因は常に自分自身にあると考えていた。できが悪い、頭のよくない、根暗な自分が悪いと考えていたのである。しかし、大学生になった私がこの書籍に触れることで大きな衝撃を受けることになる。これまでの問題は自分の個人的な問題ではなく、他の多くの在日外国人の子どもたちが抱えていた問題であると知ることができたからである。それは自分自身に当事者としての意識を芽生えさせることになり、そして、研究者への道のりを方向づけることになる。

しかし俯瞰して見てみると、この書籍に対しての私を持つ認識は必ずしも一定なものとは限らないことがわかった。時間の経過とともに日外国人の問題をより深く理解する中において、「当事者のいないところでなぜ話をすることができるのか」という思いも芽生えるようになる。それはこの書籍を否定するような思いが芽生えたということではなく、問題

を語る際の当事者の不在を感じるようになったからである。そのきっかけを作ることになったのが2冊目の書籍である。

3. 『「往還する人々」の教育戦略』志水宏吉ほか編

もう1冊の重要な書籍は『「往還する人々」の教育戦略』である。この書籍の重要な点としては私自身が当事者として登場していることである。高校卒業後に大学進学できずにブラジルへ帰国した私がインタビューに答える形で協力を行った。数年後にインタビューから書籍をもらうことになるが、私自身の描かれ方に違和感をもつようになるのである。記述された内容に誤りや虚偽はもちろんないにも関わらず、私は自分自身のことが書かれているように感じるができなかったのである。それはまるで別の他者の物語を読んでいる感覚であった。当初私は『外国人の子どもと日本の教育』を読んだ際の代弁されることに対する喜びがあった一方で、『「往還する人々」の教育戦略』では必ずしもその代弁が自分自身の世界を表していないのではと疑問を感じようになる。この経験をきっかけに私は当事者と研究者の間にある、ギャップを感じるようになるのである。

しかし、年月の経過とともに本書に対する認識も変化する。社会科学の訓練を受けていく中において、記述することの限界性や紙幅の制限、または論文におけるバランスやわかりやすさという描く側の理論に触れることによって、「ああいう風には書けないのか」と当初感じていた違和感が薄らぎ、研究者の立場に理解を示すことになる。それは一方で当事者であり、研究者である自分自身とも葛藤を抱えることになる。

4. おわりに

本研究では上記の2冊の書籍との出会いを起点に、解釈的アプローチの視点と批判的アプローチの二つの視点から発表者自身の「私」の移動のリアリティに迫ってきた。そして、単なる当事者目線の移動の実情を描くだけでなく、描かれる当事者と描く研究者という硬直的な関係性も問い直していった。

解釈的アプローチの視点から描かれることになった「私」の違和感がどこにあったのかを見ていく。「私」を事例とした書籍の中で「不適應の連鎖」として取り扱われていたことが明らかになった。日本でもブラジルでも適應できていなかった「私」の状態を示した「正しい」ものであると感じることがあった一方、「私」の中では不適應の中にも意味を見出すことができ、その意味が自身を支えることになっていた。そこにはこれまでの経験を消化していく自分と、これまでの経験にフォーカスをしてしまっている研究者の間の認識のずれがあることが明らかとなった。

一方で、批判的アプローチでは、当事者として描かれるだけでなく、当事者の側から研究を描くことによって、研究者に対して問い返しが可能となった。それはこれまで研究者が「部分的事実」を限界とし受け入れていたことをさらに問い直すことが可能を可能とした。本発表はこのような2つの視点を挑戦的に取り入れ、当事者目線の移動に迫りつつ、当事者と研究者の関係性を問い直した。

そして、本研究は当事者として描かれた研究者がそれを改めて見つめ直すという点においても特徴的であり、オートエスノグラフィ中で稀有な研究として位置付けることができる。

【参考文献】

- クリフォード、ジェームズ（足羽與志子訳）（1996）「序論—部分的事実—」クリフォード、ジェームズ・マーカス、ジョージ（編）『文化を書く』紀伊国屋書店、1-50.
- 箕浦康子（編）（2009）『フィールドワークの技法と実際 II: 分析・解釈編』ミネルヴァ書房.
- 宮高喬・太田晴雄（編）（2005）『外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版.
- 志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶致・ハヤシザキカズヒコ（編）（2013）『「往還する人々」の教育戦略 グローバル社会に生きる家族と公教育の課題』明石書店.

新たな知識の探求過程としての「移動」

—フェミニスト・スタンドポイント認識論を手がかりに—

住野 満稲子 (明治大学)

1 はじめに

異文化間教育学会においては、研究対象としての「異文化」が研究者のどのような思考過程によって措定されるかを批判的に問うことの重要性が指摘されてきた（『異文化間教育』22号 [2005]、24号 [2006] 等）。本研究では、こうした課題を、「知るもの」と「知られるもの」をめぐる関係性（認識論）や、そうした研究活動がどのような現実を前提としているのか（存在論）をめぐる課題として捉え、批判的アプローチの立場から、私自身の研究方法論の考察を通じて発展させていくことを目指すものである。本発表で依拠するメタアプローチであるフェミニスト・スタンドポイント認識論（以下FSE）は、女性の経験から、知識をめぐる権力関係を明らかにすることを焦点としている（Harding, 2004）。すべての知識は特定の社会歴史性の中で構築され、私たちの生きる物質的世界と連動し序列構造の中にあると捉える当該認識論は、本特定課題研究会で論じてきた分類の中では批判的アプローチに位置付けられよう。その主な関心は、特定の知識の成長の推進に取り組むことであり（ハーディング 2009）、すなわち、研究者自身がどのような現実を前提とし、どのような知識に関与しているのかを明示していくことが重要となる。

2 分析の視点

本発表では、FSEの主要な論者であるドロシー・スミス、サンドラ・ハーディング、パトリシア・ヒル・コリンズの議論を手がかりに、次の三つを分析の視点とした。第一に、権力作用を分析するという視点である。当該認識論では、「権力の概念的実践」（Smith, 1990）を明らかにすることが目指されており、人々の経験に関する語りは、そうした権力の作用の仕方を理解するための手がかりとなるものである。第二に、二重的状況において生じる意識を探求するという視点であり、異質性・同質性を同時に生きる経験がもたらす特定の現実の見方（Collins, 1986）を探求することがその焦点の一つである。第三に、オルタナティブな知識の生産である。人々が周縁的空間に位置づく中でいかに新たに知識を創出するかを探求することもまた重要な分析の焦点である。

本発表では、ニューヨーク市のフィールドで出会ったマリア（仮名）という女性のライフストーリー・インタビューに基づいて、複数の空間の間の「移動」の過程を分析する。（インタビューは、2020年5月にオンラインで実施。）その際、FSEの分析の視点に即し、そうした「移動」の中で生じていく意識の特徴に特に焦点を当てつつ分析を行う。分析にあたっては、フェミニスト・リサーチ・プロセスの知見（Stanley and Wise, 2013 等）を参照し、分析そのものが私自身の生きる現実や経験といかに連動しているのかを再帰的に振り返りつつ、インフォーマントの語りを手がかりにして理論的知見を産出することを試みる。

3 マリアのストーリー

マリアはドミニカ共和国出身移民の両親の下に生まれ、ニューヨーク市で育った20代後半の女性である。彼女は17歳のときに妊娠した。親の反対を受けながらも高校に通い続けた彼女は、教員や友人の励ましを受けながら高校を卒業した。20歳のときにコミュニティ・カレッジに入学したマリアは、いくつかの大学内の活動の場を渡り歩いたものの、友人関係をうまく築くことができなかった。彼女がようやく「仲間の中にいる」と実感するようになったのは、ヒスパニック学生支援組織に関与するようになってからであった。彼女は、

同様の困難を共有する人々の中で、自分の経験を語ることを通じて仲間を支援する役割を得ることになった。ところがこうした仲間とも相違点を感じるようになったのは、彼女が自分自身をバイセクシュアルであるという自覚を強く持つようになった頃である。その後、彼女はクィアの仲間たちとの時間や、ラテン系トランスジェンダーの人々の支援活動を通じて、少しずつ新たな空間を築いていく。

4 分析

研究者である私は、以上のマリアの語りを聴く中で、彼女の、複数の空間の間の「移動」の経験を理解しようとする。その中で得られた知見は次のようなものである。

彼女の「移動」の経験を捉えようとする私自身は、「ジェンダーや人種に基づいた観念が物質的不平等や精神的痛みを生み出している現実が存在する」という認識を持っていた。そうした見方は、私自身が新たなフィールドに身を置き人々と出会う中で、次第に育まれたものである。私の関心は、人々の意味世界に接近することに留まらず、そこを起点にした権力作用を理解することへと移っていった。以上の関心をもとにマリアの語りを聴いた私は、彼女の教育空間内での排除の経験に着目していた。ところが、こうした「移動」の側面は、彼女の経験の側面にすぎないということも、語りを分析する過程で見えてきた。

というのも、マリアは自分自身の「移動」の経験を肯定的な意味のあるものとして語っているためである。彼女は確かに大学生活の中で友人関係が築けなかったために何度も「移動」をせざるをえない状況にあった。しかしその「移動」の過程は彼女にとって、「自分と同じ境遇の人を助ける」という意味ある知識を獲得する過程として語られていた。

また、インタビューの過程において私は彼女に聞けなかったことがいくつかあった。そのうちの一つは、彼女の妊娠に帰結した背景に関する質問である。彼女の妊娠経験を何らかの問題ある構造と結び付けようとする観念が私の中にあり、まさにこのように妊娠した若い女性たちに対して人々が持つ否定的な観念こそが、マリアにとっての問題であったことに気づかされたためである。

5 おわりに

本発表では、マリアの「移動」の経験を捉えること、またその分析過程を省察することを通じて、次の点が明らかにされた。私は権力作用への関心から、彼女の経験における強いられていく「移動」の側面に着目するが、彼女の語りからは、意味ある知識と出会い、それらを蓄積した過程も見えてきた。また、彼女の経験を問題ある構造と結びつけて理解し分析を行おうとする私自身の見方や、私自身が生きてきた経験も浮かび上がってきた。「移動」とは、新たな解釈的コミュニティとの出会いを通じた新たな視角の獲得、そして既存の前提の問い直しを可能にするものであるとするならば (Collins, 1998)、研究者である私自身の存在論・認識論も、マリアの「移動」の経験に関する語りを聴き、分析し、研究の文脈に位置付けようとする中で、その視点が見直されていくものであった。

【参考文献】

Harding, S. (2004) (Ed). *The Feminist Standpoint Theory Reader: Intellectual and Political Controversies*, Harding, S. (Ed.), New York: Routledge.

ハーディング, サンドラ (森永康子訳) (2009) 『科学と社会的不平等 : フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』 北大路書房.

Collins, P. H. (1986) "Learning from the Outsider Within: The Sociological Significance of Black Feminist Thought." *Social problems*, 33(6), s14-s32.

Collins, P. H. (1998) *Fighting Words: Black Women and the Search for Justice*. Minneapolis: The University of Minnesota Press.

Smith, D. E. (1990) *The Conceptual Practices of Power: A Feminist Sociology of Knowledge*. Grand Rapids: Northeastern University Press.

Stanley, L., & Wise, S. (2013) Method, methodology and epistemology in feminist research processes. In Stanley, L. (Ed.), *Feminist Praxis: Research, Theory and Epistemology in Feminist Sociology*. New York: Routledge, 20-60.

公開シンポジウム

日時：2022年6月12日（日）13:00～16:00

場所：立命館大学 衣笠キャンパス 清心館 SE401

共催：立命館大学 文学部 キャンパスアジア・プログラム

キャンパスアジアの10年とこれから：

東アジア国際交流が育むグローバル人材

■ 開催趣旨

立命館大学文学部キャンパスアジア・プログラム(以下 CAP)は、日中韓3カ国が共同運営する国際教育プログラムとして、11年目を迎えます。自国以外の2カ国を移動しながら計2年間留学し、3カ国の学生が各国とともに学び、東アジアに関わる知識や日中韓トリリンガル能力を身につける類例のないプログラムとして、10年間で約360人以上の日中韓の参加学生を輩出しました。公開シンポジウムでは、こうしたCAPのこれまでの10年間の成果について、研究と実践の両面から振り返りつつ課題を浮き彫りにし、異文化間教育の関係者や研究者など幅広い方々との活発な議論を通じて、CAPの今後及び東アジアにおける国際交流を通じたグローバル人材育成のこれからの可能性について、参加者と共に考える場とします。

■ プログラム

総合司会 庵途由香（立命館大学 CAP プログラムマネージャー）

プログラム紹介 金津日出美(立命館大学 CAP プログラムマネージャー)

Part1 キャンパスアジア・プログラムの教育効果に関する学術的検証経験

湯川 笑子（立命館大学）・清田 淳子（立命館大学）

「キャンパスアジア生の多言語伸長・言語使用から見たグローバル人材育成の可能性」

北出 慶子（立命館大学）

「参加学生は、キャンパスアジア留学経験をどのように捉えたか—就職活動というライフ・トランジションにおける留学への意味付け—」

Part2 学習者の視点から キャンパスアジアを通しての学びの経験

CAP 修了生

Part3 パネルディスカッション「CAP10年の軌跡とこれから」

司会：堀江未来（立命館大学）

パネリスト：Part1、Part2 登壇者、庵途 由香

ディスカッサント：横田 雅弘（明治大学）

『異文化間教育事典』刊行記念シンポジウム

—異文化間教育の継承と創造—

日時：2022年6月12日（日） 12:00-13:00

場所：立命館大学衣笠キャンパス SE401

異文化間教育学会では、2022年6月に『異文化間教育事典』を刊行する。本事典では、異文化間教育に関わる諸項目が、異文化間教育の方法と理論、異文化間教育の対象、異文化間教育の領域という三つのカテゴリーにもとづき、網羅的に解説されている。

この『異文化間教育事典』の刊行を記念し、「異文化間教育の継承と創造」をテーマとするシンポジウムを開催する。『異文化間教育事典』は、収録された項目の一つひとつから、異文化間教育という領域を創生し、発展させてきた方々の研究・実践の軌跡をたどることができる内容となっている。そこで、本シンポジウムでは、各項目を執筆された方々にご登壇いただき、事典に記載された項目を手がかりに、異文化間教育に関する研究・実践のこれまでをふりかえる。そのうえで、参加者も交え、今後、異文化間教育は何を創造していけるかに関し、参加者全員で議論を深める。

シンポジスト：

佐藤郡衛（明治大学）

渋谷真樹（日本赤十字看護大学）

工藤和宏（獨協大学）

司会：

古屋憲章（山梨学院大学）

ネットワーキング交流会

日時：6月11日（土）12:00-13:00

場所：立命館大学衣笠キャンパス SE009

「ふらっと交流サロン」

2022年度異文化間教育学会では、ネットワーキング委員会の企画として、学会に関わる教員・実践者のネットワーキングのための交流会「ふらっと交流サロン」を開催します。ご自身が行われている研究や実践、また私生活や仕事とのバランスなどについて、参加者同士で気軽に話し合ってみませんか。情報共有をしたり、研究・実践につながるネットワーク構築の場になればと考えています。参加にあたってのご準備は不要です。せっかくの機会なので他の大会参加者と気軽に交流してみたいという方、学会大会への参加経験が浅く知り合いが少ない方、この時間帯に予定が空いていて特にすることがない方など、大歓迎です。お時間のある方は、お気軽に、「ふらっと」お立ち寄りください。前半または、後半のみの参加でも構いません。ネットワーキング委員が、交流サロン参加者の皆さんに、縦横問わず「フラット」な関係を築くお手伝いをいたします！

■ 注意事項

- ✓ 新型コロナウイルス感染対策のため、交流サロン中のお食事はお控えください。ご不便をおかけいたしますが、昼食はイベント前後に各自でお取りいただくようお願い申し上げます。
- ✓ 人数把握のため、交流会参加希望者は以下のリンクから参加登録をお願いします。（定員に空きがある場合は飛び入りでの参加も可能ですが、原則として、事前登録をお願いします。）

<https://forms.gle/JzZFdmgRsco8XoEv7>

■ プログラム：（参加者数によって内容が変更になる可能性があります）

12:00 - 12:05 開会挨拶・趣旨説明

12:05 - 12:30 小グループで交流①（ご自身の研究・実践を話題に自己紹介・交流）

12:30 - 12:55 小グループで交流②（研究・実践と私生活とのバランスを話題に交流）

12:55 - 13:00 アンケート記入・閉会挨拶

■ 企画・運営：ネットワーキング委員会

新見有紀子（東北大学）

金南咲季（椋山女学園大学）

中尾有岐（国際交流基金）

藪田直子（大阪成蹊大学）

由井一成（早稲田大学）

発表について

研究発表は、以下の種別で行なわれます。発表者、題目、時間帯、会場などの詳細は、それぞれの部会のページをご覧ください。

個人発表 共同発表 ケース／パネル発表 ポスターセッション

1. 発表時間（*交代時間を含みますのでご注意ください）

- A. 個人発表 30分（発表 20分、質疑応答 10分）
- B. 共同発表 60分（発表 40分、質疑応答 20分）
- C. ケース／パネル発表 90分（発表 50分、質疑応答 40分）

※会場での運営は、各グループでお願いいたします。

参加者による質疑応答の時間を確保するようご配慮ください。

- D. ポスターセッション 6月11日(土)09:30-18:00、6月12日(日)09:30-16:00

※パネルのサイズが横 90cm×縦 210cm ですので、それに収まる範囲内でご準備下さい。

会場は 09:00 からご準備いただけます。

12日(日)09:30-10:30の時間帯は必ず在席してください。（その他の時間は任意です。）

12日(日)16:00に各自でポスターを撤去してください。撤去されないポスターは、事務局で処分いたします。

2. 配布資料

- 紙の資料配布は必要ありませんが、もし配布を希望される場合は、1発表につき 30部程度ご用意ください。優秀発表賞にエントリーされた方は、「発表時の配布資料」も評価・審査対象となりますのでご用意ください。なお、大会実行委員会では印刷をお受けすることはできません。また会場では印刷機がご利用いただけません。ご了承ください。

3. 発表に使用する機器等について

- 会場校では各教室にプロジェクターまたはディスプレイを用意しておりますが、パソコンのご用意はありません。ご自身のパソコンをお持ちください（お持ちになれない場合は、大会実行委員会まで事前にメールでご連絡ください）。Macの場合はアダプターもご用意ください。会場では HDMI または RGB での接続となります。ご発表のセッションが始まる前に、各自動作確認等を行って下さい。
- 機材の設定および操作は発表者ご自身で行ってください。
- インターネット接続につきまして、学内 WiFi はご利用になれません。各自でご準備ください。ただし、キャンパス内の全ての無線アクセスポイント設置個所で eduroam の利用が可能です。ご所属の機関で発行されている ID でご利用ください。
- なお、オンライン発表会場については、こちらで学内有線に繋がるパソコンを用意します。ZOOM リンクについては個別で発表者にご連絡します。

4. 発表者欠席の場合

- やむを得ない事情により発表者が欠席する場合には、できるだけ前日までに大会準備委員会宛にメールでご連絡ください。
※第 43 回大会準備委員会 e-mail: ibunka43@gmail.com
- 発表取りやめがあっても、プログラムの繰り上げはいたしません。

異文化間教育学会「優秀発表賞」について

異文化間教育学会事務局

異文化間教育学会では、異文化間教育学の発展を期して、会員の研究発表を奨励し、研究発表の向上を図ることを目的として、「優秀発表賞」を設けています。この賞は、若手の研究者を対象とし、当該大会における「個人研究の個人発表」の中から、優秀と評価された発表に与えられるものです。

下に示す規程にあるとおり、優秀発表賞の審査を受けるためには、発表者自身が受賞資格の条件のいずれかに該当することを申告し、審査対象となる意思を表明する必要があります。発表申し込み時に、優秀発表の審査の希望の有無を、大会 HP 上の「個人発表申し込み」の欄で選択してください。個人発表申し込み締切り後、必要に応じて、事務局より確認のためのメールをお送りすることがございます。

受賞資格を有する皆さん、審査への積極的なお申し出をお待ちしております。

なお、優秀発表賞の選考方法（選考の手続き、審査対象・審査基準）については、下記の規定と併せて学会 HP をご覧ください。

異文化間教育学会優秀発表賞規定

名称： 異文化間教育学会「優秀発表賞」と称する。

趣旨： 若手の研究者を表彰し、研究発表の奨励、研究内容の向上を図ることを目的とする。

表彰人数： 表彰人数は若干名とする。

対象者： 大会における個人研究の個人発表者で、受賞資格を有する者※とする。

選考方法： 優秀発表賞審査委員会を設置し、審査委員会による選考後、理事会の承認を得て決定する。

審査委員会： 優秀発表賞審査委員会は、研究委員会委員長の指名により理事（研究委員会委員長を含む）で構成する。

任期は1年とする。審査委員会は、選考方法に従って優秀発表賞受賞者の選考を行い、その結果を理事会に諮る。

結果の公表・表彰： 審査結果は学会ホームページを通じて公表する。また、大会で表彰し、副賞を与える。

本規定は、会則第9条に基づき理事会が定めるものとする。

本規定は、2013年12月7日より発効する。

受賞資格

① 発表者が応募時に以下のいずれかに該当する場合、受賞資格を有するものとする。

大学院修士課程もしくは大学院博士課程に在学中である

修士課程修了後10年以内である

（複数の修士課程を修了した場合は、最後に修了した修士課程が対象）

最終学歴が学部卒業の場合は、卒業後12年以内である

修了後の期間は、修了・卒業月の末日を修了日として起算する

例えば、大学院修士課程修了者で、3月修了の場合は、3月31日を修了日として、10年後の3月31日までが受賞資格を有する期間とする。

② 優秀発表賞の審査を受けるためには、発表者自身が上記条件のいずれかに該当することを申告し、審査対象となる意思を表明する必要がある。

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「日本語教育」 6月11日(土)

SE205 教室

司会：小柴裕子（宮崎大学）

- 14:00—14:30 留学生に対するオリジナルアニメ作品を用いた日本語教育
—「アニメーション」の概念に基づく活動—
矢崎満夫（阿南工業高等専門学校）
- 14:30—15:00 外部人材からみた外国人児童生徒のいる学校—ある日本語支援員の語りから—
中川康弘（中央大学）
- 15:00—15:30 「複合リテラシー」を考える～言語ポートレート活動をふまえて～
小柴裕子（宮崎大学）
- 15:30—16:00 日本語教師養成講座受講生の自己研鑽意識につながる意識変容に関する研究
—理論科目での意識変容に着目して—
俵加奈子（お茶の水女子大学大学院）

個人発表 「多文化教育」 6月11日(土)

SE205 教室

司会：青木香代子（茨城大学）

- 16:00—16:30 大学における社会正義のための教育実践の可能性
—マイクロアグレッションを例にした授業実践の分析を通して—
青木香代子（茨城大学）
- 16:30—17:00 インターセクショナリティを視点とした分析の特質と異文化間教育の課題
—ドイツの議論を参照して—
伊藤亜希子（福岡大学）
- 17:00—17:30 全学科目としての「日本語教育基礎」の実践
—言語イデオロギーの意識化の試み—
藤原由紀子（関西学院大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「留学生」 6月11日(土)

SE206 教室

司会：村田晶子（法政大学）

- 14:00—14:30 日本の建設系学部における英語プログラム留学生の留学動機
—日本で働く外国人技術者の留学経験の分析から—
柴山俊也（早稲田大学大学院日本語教育研究科）
- 14:30—15:00 同化の業績主義 元留学生外国人社員の職場での同化の過程と経験に注目して
郷司寿朗（長崎大学グローバル連携機構）
- 15:00—15:30 中国人留学生の留学の成果と満足度の関連要因—困難への対処方略を中心に—
張慧穎（お茶の水女子大学）
- 15:30—16:00 コロナ禍の留学経験を通じたレジリエンスとキャリア選択
村田晶子（法政大学）

個人発表 「留学生」 6月11日(土)

SE206 教室

司会：坂井伸彰（長浜バイオ大学）

- 16:30—17:00 コロナ禍のネパールにおける日本語教育機関の実情と課題
—首都カトマンズの学校経営者に対するインタビュー調査から—
村本茜（鹿児島大学大学院博士前期課程）
- 17:00—17:30 元留学生外国人社員が直面する葛藤解決方略
—ミクロ・メゾ・マクロの視点からの分析—
坂井伸彰（長浜バイオ大学）
- 17:30—18:00 在日留学生によるアカデミックライティング体験に関する検討
閔琬新（東北大学大学院教育学研究科）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「マイノリティ」 6月11日(土)

SE001 教室

司会：吉田夏帆（兵庫教育大学）

- 14:00—14:30 教師による異文化理解が少数民族児童の修学状況にもたらし得る影響
—多民族国家ラオスを事例に—
吉田夏帆（兵庫教育大学大学院）
- 14:30—15:00 在日コリアンのエスニシティ継承—アイデンティティに着目して—
安本博司（大阪府立大学 客員研究員）
- 15:00—15:30 越境経験と教育実践—セルフスタディからの気づき—
齋藤真宏（旭川大学）
- 15:30—16:00 オタク・アイデンティティの心理学的検討
—自尊心やオープンネス、メンタルヘルスとの関係から—
中尾元（追手門学院大学）

個人発表 「海外帰国児童生徒」 6月11日(土)

SE001 教室

司会：芝野淳一（中京大学）

- 16:30—17:00 海外帰国生の言語実践を通じたアイデンティティと社交空間の交渉
—女子生徒による韓国語使用とその複層的意味に焦点を当てて—
井濃内歩（筑波大学大学院人文社会科学研究科）
- 17:00—17:30 帰国した在外教育施設派遣教員に関する調査のデザイン
—先行調査を紐解きつつ—
芝野淳一（中京大学）
- 17:30—18:00 国際語としての英語教育と異文化適応の第2言語教育被検者参加型調査法から考える異文化教育
大味潤（東京経済大学非常勤講師）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「異文化理解」 6月11日(土)

SE002 教室

司会：高橋美能（東北大学）

- 14:00—14:30 海外留学中断後のオンライン留学が日本への再適応とキャリア発達に与える影響
上西智子（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）
- 14:30—15:00 多様なバックグラウンドを持つ学生が「人権」を学ぶ意義と効果
—対面とオンラインで実践した国際共修授業を比較して—
高橋美能（東北大学）
- 15:00—15:30 ウィズコロナにおける異文化学習
：インターネット情報を通じたデジタルネイティブ世代の学びのプロセス
山田亜紀（玉川大学）
- 15:30—16:00 超短期オンライン海外プログラムにおいても異文化適応力を伸ばす方策
— 客観的評価とアンケート調査に裏付けられた成果 —
小早川裕子（東洋大学）

個人発表 「異文化理解」 6月11日(土)

SE002 教室

司会：斎藤敬太（津田塾大学）

- 16:30—17:00 障害児との交流学習における児童の相手理解の様相
海道朋美（関西大学大学院）
- 17:00—17:30 多文化共生を考えるためのデジタル・ストーリーテリングの取り組み
白頭宏美（慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス）
- 17:30—18:00 言語景観を通じた多文化共生教育の実践
斎藤敬太（津田塾大学非常勤講師）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「外国人児童生徒」 6月11日(土)

SE003 教室

司会：坪谷美欧子（横浜市立大学）

- 14:00—14:30 外国につながる高校生の学校適応の研究（1）
—来日後の友人関係の形成と学習動機付け—
宮下大輝（慶應義塾大学大学院社会学研究科）
- 14:30—15:00 外国につながる高校生の学校適応の研究
—（2）日本および母国の家庭的要因と学校適応過程—
坪谷美欧子（横浜市立大学）
- 15:00—15:30 生徒の出身国別にみた学習・学校生活—都立X高校定時制における生徒調査—
高橋史子（東京大学）
- 15:30—16:00 外国につながる生徒の居場所としての高校—卒業生への生活史調査から—
黒田協子（上智大学 大学院博士後期課程）

個人発表 「外国人児童生徒」 6月11日(土)

SE003 教室

司会：高橋史子（東京大学）

- 16:30—17:00 教員文化はどのように移民背景を持つ生徒の人間性評価に反映されるか
—定時制高校における質的研究から—
大國七歩（東京大学大学院博士課程）
- 17:00—17:30 外国にルーツをもつ児童を支える担任教員の専門性
—児童の文化的多様性を尊重した教員の実践に着目して—
大倉百理子（会社員）
- 17:30—18:00 日韓の多文化を背景に持つ子どもたちを対象にした言語支援策の比較研究
—継承語の支援に焦点を合わせて—
徐銀永（慶應義塾大学 博士課程）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「ボランティア」 6月12日(日)

SE204 教室

司会：西谷まり（一橋大学）

- 10:30—11:00 なぜ彼は技能実習生を日本に送り出すのか
—技能実習生送り出し会社の社長ライフストーリーから—
西谷まり（一橋大学）
- 11:00—11:30 地域社会史からみる外国人支援—大和定住促進センターの経験の継承—
高橋泉（星槎大学大学院博士課程2年）

個人発表 「マイノリティ」 6月12日(日)

SE205 教室

司会：山ノ内裕子（関西大学）

- 10:30—11:00 学校における「食マイノリティ」対応—合理的配慮の観点から—
山ノ内裕子（関西大学）
- 11:00—11:30 在日コリアン「民族学級」における「名付け」と「名乗り」
—大阪府下公立小学校の事例から—
洪里奈（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程）
- 11:30—12:00 国際移動と主観的ウェルビーイング
—在英フィリピン人看護師が経験する差別とエンパワメント—
浅井亜紀子（桜美林大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表 「海外帰国児童生徒」 6月12日(日)

SE206 教室

司会：乾美紀（兵庫県立大学環境人間学部）

10:30—11:00 発表辞退

11:00—11:30 場への「参加」の重要性

—三つのオルタナティブな教育実践を行う高校でのエスノグラフィー—

平野邦輔（東京経済大学）

11:30—12:00 オンライン・スタディツアーへの新たな挑戦

—ラオスでの教育支援を実現するために—

乾美紀（兵庫県立大学）

個人発表 「異文化理解」 6月12日(日)

SE001 教室

司会：岸磨貴子（明治大学）

10:30—11:00 国際共修で構築される学びの「場所」

—スペシャル・レポーターとしてのコンピテンスの模索—

加藤鈴子（九州工業大学）

11:00—11:30 社会の課題を自分ゴトにつなげるための4つのアプローチ

—NHK for School の映像コンテンツを活用したSDGs教育プログラムの開発—

岸磨貴子（明治大学）

11:30—12:00 生涯学習・社会教育としての日本語教育—キャリア支援の観点から—

松下恵子（和歌山大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表 6月11日(土)

SE202 教室

司会：平井達也(立命館アジア太平洋大学)

14:00—15:00

異文化コミュニケーションにおける「やさしさ」と「豊かさ」の緊張関係

— 教育学部生・留学生共同ワークショップ参加者の「やさしい日本語」—

石田喜美(横浜国立大学)

半沢千絵美(横浜国立大学)

15:15—16:15

オンラインによる海外研修の課題と可能性

—三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に—

奥田久春(三重大学)

松岡知津子(三重大学)

共同発表 6月11日(土)

SE202 教室

司会：小野詩紀子(南山大学)

16:30—17:30

国際共修ルーブリック—開発とそのプロセス—

末松和子(東北大学)

北出慶子(立命館大学)

村田晶子(法政大学)

尾中夏美(岩手大学)

高橋美能(東北大学)

秋庭裕子(東洋大学)

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表 6月11日(土)

SE203 教室

司会：小野詩紀子(南山大学)

14:00—15:00 国際教育交流分野における「第三領域 (third space)」の研究
—日本における近年の研究動向と人事公募の現状と課題について—

高木ひとみ (名古屋大学)

藤井基貴 (静岡大学)

太田知彩 (名古屋大学大学院)

星野晶成 (名古屋大学)

共同発表 6月11日(土)

SE203 教室

司会：筆内美砂(立命館アジア太平洋大学)

15:15—16:15 Long-term Outcomes of the Japan-Mexico Exchange Program
:An Exploration of the Experiences of 50 Years

Yukiko Shimmi (Tohoku University)

Akinari Hoshino (Nagoya University)

Francis Peddie (Nagoya University)

Kyoko Tanaka (Nagoya University)

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表 6月11日(土)

SE204 教室

司会：近藤祐一(立命館アジア太平洋大学)

14:00—15:00 岩手大学-アラスカ大学アンカレジ校 ジョイント COIL プロジェクト

尾中夏美(岩手大学)

原田宏子(アラスカ大学アンカレジ校)

15:15—16:15 (文化的) アイデンティティと「居場所」との関係性は？

—留学生と日系国際児の場合—

石橋道子(国際大学)

鈴木一代(埼玉純真短期大学)

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

ケース／パネル発表 6月12日(日)

SE202 教室

10:30—12:00

外国につながる生徒の把握と包括的支援に向けた課題

—都立高校における質問紙調査とインタビューをもとに—

共同発表者, 司会者 額賀美紗子 (東京大学)

共同発表者 金侖貞 (東京都立大学)

共同発表者 三浦綾希子 (中京大学)

共同発表者 徳永智子 (筑波大学)

ディスカッサント 角田仁 (東京都立町田高等学校定時制)

ケース／パネル発表 6月12日(日)

SE203 教室

10:30—12:00

グローバル化で求められる高等学校段階の教育とその課題

—「外国人生徒等教育」に見る包摂性と公正性から—

共同発表者 見世千賀子 (東京学芸大学)

共同発表者, 司会者 齋藤ひろみ (東京学芸大学)

共同発表者 武内博子 (東京学芸大学)

ディスカッサント 野崎志帆 (甲南女子大学)

ポスター発表

会場：清心館 1 階 commons

6 月 11 日：09：30～18：00

6 月 12 日：09：30～16：00

2 日目 9:30-10:30 のポスターセッションについては発表者に必ず在席していただきます。
1 日目 9:30-18:00、2 日目 10:30-16:00 のポスターセッションは、任意の在席となります。

1. 遠隔授業疲れの学生の心を掴んだオンライン短期海外研修

宇治谷映子（名古屋外国語大学）

2. 日本企業における韓国人就労者の文化的ダイバーシティ風土への認識

—外国人就労者が多数を占める職場に焦点を当てて—

文吉英（亜細亜大学）

岡村佳代（聖学院大学）

加賀美常美代（目白大学）

3. 日本企業における外国人就労者の文化的ダイバーシティ風土への認識

—外国人就労者が少数の職場に焦点を当てて—

守谷智美（岡山大学）

小松翠（東京工業大学）

加賀美常美代（目白大学）

4. 社会通念と外国人への対応に焦点をあてた異文化間ソーシャルスキル学習

—在日留学生を対象とした個別セッションの試み—

田中共子（岡山大学）

中野祥子（山口大学）

5. オンライン国際連携学習（COIL）の教授法：サービス・ラーニング活動テーマの選択と

バルネラビリティの共有がパートナーシップの形成に及ぼす影響

山下美樹（麗澤大学）

6. 異文化間感受性を高めるオンラインの学習プログラムのデザイン

—生徒の傍観者的態度に着目した事前学習と接触活動の検討—

岩澤直美（東京大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

7. 「ブレンデッド・ラーニング」の概念形成に関する考察

—ポスト・コロナ時代における異文化間教育実践の「再」構築に向けて—

堀江未来（立命館大学）

藤井基貴（静岡大学）

小野詩紀子（南山大学）

松本哲彦（東明館中学校・高等学校）

8. 言語不安の文化的側面に関する予備的研究—文献調査を通して—

會田篤敬（山梨大学）

9. 正課外英会話学習に係る基礎調査と展望—初歩段階における情意的側面に着目して—

佐々木一成（岩手大学大学院生）

會田篤敬（山梨大学）

10. 外国人児童生徒等の在籍学級での学習参加を課題とした教員研修

—群馬県 伊勢崎市 の 教員 研修 を 事例 として—

小池亜子（国土館大学）

古川敦子（津田塾大学）

11. 移住二世世代の青年期キャリア形成—PAC分析を手がかりに—

佐々木良造（静岡大学）

吹原豊（福岡女子大学）

助川泰彦（東京国際大学）

12. 気候市民会議の実践と市民性の諸相—脱炭素かわさき市民会議の事例から—

稲田素子（立教大学兼任講師）

13. オンライン共修の一考察 —参加者の声から見えてくるもの—

恩村由香子（東京国際大学）

14. オンライン日中交流会を通じた日本語教育学授業の受講生の学び

—日本語教員養成および多文化共生社会実現の観点から—

中井陽子（東京外国語大学）

丁一然（東京外国語大学）

夏雨佳（東京外国語大学）

15. オンラインフィールドトリップの試み

阿部祐子（国際教養大学）

16. ライティング指導に見られる異文化性—教師研修の視点からの考察—

松岡洋子（岩手大学）

17. 留学生教育交流の現状と課題—激動の世界の中で考える—

有川友子（大阪大学）

18. 滞日中国人留学生のインターネットを使用した被支援志向性
—ソーシャルサポートと適応の観点から—

工藤昭子（国際武道大学）